

北海道における美術のあゆみ

林竹治郎と黒百合会に着目して

北海道立近代美術館学芸員

野田 佳奈子 (のだ かなこ)

2014年、北海道教育委員会に採用。同年より北海道立帯広美術館学芸員として勤務。2020年より現職。



1 はじめに

ここ北海道において、芸術の道を志す人々が現れ始め、後世にまで連なる活動が見られるようになるのは、明治中後期のことです。この時代、例えば函館では、円山派の画家・川端玉章に学んだ北条玉洞（図1）が絵画専門学校を開き、札幌では、東京美術学校（現・東京藝術大学）出身の林竹治郎や菅原翠洲（図2）、白青山や石川確らが来道し教鞭を執るなど、指導的な役割を果たす人々が現れたことによって、制作の活動が広まっていくようになりました。また、東北帝国大学農科大学（現・北海道大学）の美術同好会「黒百合会」は、美術界の新たな傾向を伝え、北海道の画家や絵の好きな若者たちに刺激を与えています。彼らの影響を受け、のちの北海道画壇をリードする作家たちが育まれていきました。もちろんそれ以前にも、江戸時代に活躍した小玉貞良や蠣崎波響、明治初期の横山松

三郎や高橋勝蔵など、この地にゆかりある絵師や画家などはいましたが、彼らの仕事は次の世代へ直接関わるものではありませんでした。一方、19世紀末から20世紀初めの、つまり明治から大正期には、ある作家や団体が後進を導き、育成し、次の世代へと広がっていく大きなうねりが見られます。

本稿では、林竹治郎と黒百合会に着目し、北海道の美術がいかん歩んできたのか、その一端をご紹介します。

2 林竹治郎—画家として、指導者として

林竹治郎（1871–1941、図3）は、明治末から昭和初期において、一人の洋画家として、また指導者として功績を残した人物です。1871（明治4）年に宮城県に生まれ、1889（明治22）年、開校間もない東京美術学校に入学。当時は、明治初期に行われた欧化政策の反動で国粋主義が台頭した時代であり、日本の伝統美



図1（左） 北条玉洞《牡丹孔雀図》（絹本彩色、1897年、北海道立近代美術館寄託）



図2（右） 菅原翠洲《出山之釈迦》（絹本彩色、1928年、北海道立近代美術館蔵）



図3 林竹治郎（1935年撮影）、『林竹治郎画集—祈りと讃美』（新教出版社、1979年）より転載

術を重視する方針から、東京美術学校にはまだ西洋画科が設置されていませんでした。林は橋本雅邦らのもとで日本画を学ぶ一方、洋画を習うために明治美術会の小山正太郎のもとへ通っていたと言われています。1892（明治25）年、教員養成のための課程を修了した後は図画教諭となり、仙台、桐生、岡山、福島で勤務した後、1898（明治31）年に札幌へ赴任。特に札幌中学校（のちの札幌第一中学校、現・札幌南高等学校）で長く教壇に立ち、校内の美術クラブ「霞会」でも絵を教えました。林は、1939（昭和14）年に札幌を離れるまでの約40年間、北海道師範学校（現・北海道教育大学）や札幌第一中学校、第二中学校（現・札幌西高等学校）、藤高等女学校（現・藤女子高等学校）などで教鞭を執り、北海道における美術教育に長く貢献しました。

林の代表作として知られているのが、《朝の祈り》（図4）です。これは、敬虔なクリスチャンであった林が家庭礼拝を題材とした油彩画であり、ちゃぶ台を囲んで祈りを捧げる家族の姿を、茶褐色を基調とした写実的な作風で描いています。モデルとなったのは、林の家族と当時林の家に寄宿していた学生です。本作は、当時最も権威のあった官設展、文部省美術展覧会の第一回展に北海道から唯一入選したものであり、林にとっても、また北海道の美術の歴史においても重要な一点として位置づけられています。

林の教え子には、中学を出てからも美術に関わりを持ち続けた人物が少なくありません。例えば、生命感ある彫刻を手掛けた中原悌二郎や、新たな画風に次々と挑戦しながら詩的な作品世界を展開した三岸好太郎などは、東京に出て、日本の近代美術史に大きな足跡を残しています。また、能勢眞美や今田敬一は、のち



図4 林竹治郎《朝の祈り》（油彩・キャンパス、1906年、北海道立近代美術館蔵）

の北海道画壇で中心的な役割を担いました。このほか宮本金次は、代用教員として赴任した網走で、のちに画家となる居串佳一と出会い、絵の手ほどきをしたことで知られています。このように、林が蒔いた「種」は広く各地で芽吹いていったのです。

その一方、彼らの作風は林の傾向を継いだものではありませんでした。明治時代末から大正にかけて、中央では印象派風の明るい色彩による写実描写という従来のアカデミックな表現を乗り越えて、芸術家の個性や主観を表すことが追求され、多彩な作品が生み出されてきました。そんな中、林の授業は「客観的描写の基本^{*1}」に重きを置くものであり、「その頃はやり出した新しそうな絵の真似なんかした時は、絵の裏に7点2分なんてのと一緒に、辛辣にして懇切なお叱りの文句が書いてあった^{*2}」というエピソードも残されています。こうした指導や、林の作品に見られる穏健な写実的作風は、清新な潮流に目を向ける生徒達にとって物足りなく感じられたようです。

しかし、林は新たな様式自体を強く否定していたわけではありません。「絵の根本的教養は決して固定、拘束や萎縮停滞の原因でない。むしろ変化自在通の支点定礎を成すもの^{*3}」と語る林の言葉を踏まえるならば、それは基本となる描法を踏まえた上で臨むべきものと捉えていたと考えられます。芸術における価値観やその表現が移り変わっていく時代にあって、林のもとから制作の道に進む者が多かったのは、確かな画力に基づいて「絵の根本的教養」を教えたその指導が、美術に親しみ、表現を追求するための基盤を培ったためとも言えるかもしれません。

3 黒百合会—展覧会による普及活動

林が主に学校教育を通じて美術を愛でる心を育んだとすれば、時代の潮流を北海道に伝える役割を果たしたのが、東北帝国大学農科大学の美術同好会「黒百合会」です。1908（明治41）年、大学の英語講師を務めていた有島武郎（1878-1923）と数名の学生が立ち上げたこの会は、初期の頃には会長も規則も会費もない自由な気風のもとで絵を描き、年に一度、小学校の教

*1 鈴木正實「林竹治郎と『朝の祈り』」（『赤れんが』72号、北海道総務部行政資料室、1982年）、p. 20。

*2 能勢眞美「先生と私」（『黎明期の画家 林竹治郎展』図録、北海道立美術館、1974年）、p. 24。

*3 林竹治郎、「感想」（『黒百合会回顧録』、北海道帝国大学文芸会美術部、1931年）、p. 86。

室などを借りて展覧会を開いていました。出品作品の多くは水彩画で、学生と共に有島も絵を発表しています。今田敬一は有島の作品について、「そのころとして極めて進歩的な、印象主義の美しい絵」を描いており、初めは水彩画を、そののち油彩画を手がけ、「ピサロのように優雅な点描の絵を見せてくれた*4」と語っています。(図5、6)



図5 有島武郎《黒百合会の学生たち》(水彩・紙、1909年、ニセコ・有島記念館蔵)

大学のアマチュア団体である黒百合会が、なぜ主導的な役割を果たし得たのでしょうか。その理由の一つには、当時の黒百合会展では会員だけでなく、著名な芸術家の作品を「参考品」と称して展覧する取り組みも行っていたということが挙げられます。

例えばこの頃、『白樺』の同人であった有島との繋がりによって、ゴッホ、セザンヌ、ゴーギャンといった後期印象派の画家たちの複製画などが、黒百合会展の中で紹介されています。『白樺』は、武者小路実篤や志賀直哉、有島生馬など学習院同窓生によって1910



図6 有島武郎《やちだもの木立》(油彩・板、1914年、北海道立近代美術館寄託) 1915年、有島が札幌を去るときに、大学教授の宮部金吾氏へ贈った1点。

(明治43)年に創刊された文芸雑誌で、小説やエッセイだけでなく、西洋絵画の写真図版や紹介文などもさかんに掲載し、美術界をリードする活動を展開していました。1913(大正2)年の第六回黒百合会展を見た当時の学生は、展示された複製画について「雑誌で小さな版画を見るより以上の気分が味わい得られた。欲を云うなら三色版でもよいから色があつたらと思った*5」と記しています。これらは、色彩に乏しくとも当時としては精巧な出来であり、西洋美術を間近に感じさせる役割を果たしていました。

黒百合会展ではこのほかにも、当時中央で活躍していた美術家の作品を展示しています。その中では、有島生馬や田辺至らの油彩画や、南薫造の水彩画、藤井浩祐の彫刻などが紹介されています。黒百合会創立会員の小熊焯は次のように語ります。「自分の技術を向上させる為には、会員相互の作を見る事がその通り有効で且つ必要な事であるから、況して大家の作を親しく見ると云う事は、それ以上に重要な事であるに違いない。そこで色々の関係をたどって、当時中央画壇で^{すでに}已に一家をなして居る所謂大家の作品を、黒百合会の度に数点宛拝借して参考出品とする習慣が出来た。(中略)札幌育ちの人々には、こうして我々が東京から送って貰う参考品は大抵初見参であって、夫れから大きな感激を受けると同時に我々の会に対しても或る程度の感謝をしてくれた向きが多かった*6」。札幌で油絵具を入手することすら難しかった当時、第一線で活躍していた作家の実作を見ることが、感動と驚きを与えたことは想像に難くありません。

このように黒百合会は、当時画壇を賑わせた様々な作品を紹介することによって、同時代の動向を札幌へ伝える役割を果たしました。後期印象派やその影響を受けた日本人作家の作品は、人々の目を楽しませるとともに、北海道へ近代美術の息吹をもたらしていきました。

また、1912(大正元)年の第五回黒百合会展では、札幌中学校や北海道師範学校、北海中学校(現・北海高等学校)の生徒の作品も併せて展示されています。これは、この3校からの申し出を受けて実施されたも

*4 今田敬一『北海道美術史』(北海道立美術館、1970年)、p. 33。
*5 石野信太郎「黒百合会記事」(『黒百合会回顧録』、北海道帝国大学文芸美術部、1931年)、p. 128。
*6 小熊焯「黒百合会三十年を語る」(『続黒百合会回顧録』、北海道帝国大学文芸美術部、1936年)、p. 39。

ので、生徒たちの絵画44点が、黒百合会員や美術家の作品とともに会場に並べられました。当時、北海道師範学校に通っていた水彩画家・繁野三郎は次のように語っています。「その頃の黒百合会は、同展の一部を中等学校の為に割いて美術オリンピックの感があった。従ってその画展に出陳されることは、華しい美術登龍門通過の喜びであったのである*7」。なお第五回展には、『白樺』から借りたロダンのブロンズ3点も展示されています。大家から学生まで、数々の作品がずらりと並んだ本展からは、当時の黒百合会の求心力の高さがうかがえるでしょう。

黒百合会は、展覧会という機会を通じて、話題の作品を紹介する活動を展開し、また時には絵を描く若者にとっての登竜門の役目を担うことによって、北海道の美術の発展に寄与しました。その後1925（大正14）年に道内各地の芸術家が結集し、「北海道美術協会」が立ち上げられるまで、黒百合会は道内最大規模の美術団体として重要な役割を果たしました。

4 おわりに

明治から大正にかけての北海道では、林竹治郎が優れた画力と堅実な指導によって、美術の基礎や絵画に親しむ心を教え、若い世代を育てていきました。また黒百合会は、作品を展覧することを通じて新風をもたらし、道内美術界の進展に貢献しました。芸術に関する情報も学ぶ機会もまだ少なかった当時において、彼らの活動は、美術への関心や制作意欲を刺激するものであったと言えるでしょう。その影響を受けた者たちの中には、のちの北海道の美術界を牽引する人々も数多く見受けられます。林と黒百合会は、それぞれの取り組みによって次の世代を導いたのであり、北海道における近代美術の礎を築いたのでした。

付記

本文中の引用箇所については、読みやすさを考慮し、原則として常用漢字を使い、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。また、適宜句読点とふりがなを補った。

* 7 繁野三郎「黒百合会断想」（『続黒百合会回顧録』、北海道帝国大学文芸会美術部、1936年）p. 16。

主要参考文献

【論文・定期刊行物】

- 鈴木正實「俣野第四郎・人と芸術―日記による考察（1）-（6）」（『北海道立近代美術館研究紀要 2 - 8』、1979-1986年）
鈴木正實「林竹治郎と『朝の祈り』」（『赤れんが』72号、北海道総務部行政資料室、1982年）
佐藤由美加「三岸好太郎の初期画業―中学時代から春陽会まで」（『紀要 2000-01』、北海道立近代美術館ほか、2001年）

【書籍・展覧会図録】

- 『黒百合会回顧録』（北海道帝国大学文芸会美術部、1931年）
『続黒百合会回顧録』（北海道帝国大学文芸会美術部、1936年）
今田敬一『北海道美術史―地域文化の積みあげ』（北海道立美術館、1970年）
『黎明期の画家―林竹治郎展』図録（北海道立美術館、1974年）
『林竹治郎画集―祈りと讃美』（新教出版社、1979年）
工藤欣也・寺嶋弘道『三岸好太郎―夭折のモダニスト』（北海道新聞社、1988年）
『白樺派と近代美術』図録（千葉県立美術館、1989年）
『日本の美術 第349号 明治の洋画―高橋由一と明治前期の洋画』（至文堂、1995年）
『日本の美術 第350号 明治の洋画―明治の渡欧画家』（至文堂、1995年）
『日本の美術 第352号 明治の洋画―鹿子木孟郎と太平洋画会』（至文堂、1995年）
『日本の美術 第353号 明治の洋画―浅井忠と京都洋画壇』（至文堂、1995年）
『北海道立近代美術館コレクション100選』（北海道立近代美術館、1997年）
『美の使徒―林竹治郎とその教え子たち』図録（北海道立三岸好太郎美術館、1998年）
苫名直子『画家たちの札幌―雪と緑のメモワール』（北海道新聞社、1999年）
『有島武郎・今田敬一―黒百合会の画家たち展』図録（滝川市美術自然史館、2001年）
『北の個人美術館散歩―風土を彩る6人の洋画家たち』（北海道立三岸好太郎美術館、2006年）
佐藤由美加『北の水彩―みづゑを愛した画家たち』（北海道新聞社、2005年）
『『白樺』誕生100年―白樺派の愛した美術』図録（京都文化博物館ほか、読売新聞大阪本社、2009年）
『北海道美術50―学芸員が語る名品のヒミツ』（北海道立近代美術館・北海道立三岸好太郎美術館、2017年）